

ヒトラーは生きている——ケムトレイルについて

平和統一 NEWS 58号 (2013/7月号)

渡辺 久義

「ケムトレイル」といっても何のことか知らない人が多い。今もし晴れていたら、空を見上げていただきたい。飛行機雲に似ているが、もっと太く、いつまでも消えないで残っている飛行機の航跡が何本か見えないか？ それがケムトレイルである。今、世界中にこれが起こっていて、撒かれているのは毒物である。ここ数カ月、わが国で散布の量も頻度も急増したので、ネット上では日本語のサイトがかなり増えている。

何の話かわからないという人は、今、私が人に勧めているユーチューブ「ケムトレイル集中散布(1-8)」をご覧になるとよい。これはある女性が、毎日のように頭上で起こっているこの異常な現象について、防衛省、外務省、航空自衛隊などに電話で問い合わせる内容になっている。どこの省庁も、答えられない、答えたくないという事情がよくわかって、たいへん勉強になる。私自身も試しにメールで気象庁に訊いてみたが、案の定“なしのつぶて”だった。これはわが国では、新聞でもテレビでも一切報道しない。なぜなのか、おわかりだろうか？

何か背後に、恐ろしく触れてはならないものがあることは推測できる。現に我々の頭上で異常事態が起こっていて、それは明らかに人がやっていることなのに、あたかも、どうすることもできない自然現象であるかのようにであり、しかも、こうやってそれを指摘するのは“変な人”であるかのようなのだ。我々はそれほど異常な世界に住んでいる。読者にはどうか関心をもっていただき、自分で調べてみて欲しい。

これはこの欄で私が数年来、ずっと取り組んできた途方もなく大きな問題の一つの現れである。最初それは、我々に直接関係のない遠い世界の話のようだった。しかしそれが今、文字通り我々の「身に降りかかって」きた。これは、この地球惑星を本当に自分たちの所有物だと思っている「権力エリート」と言われる連中が存在することの、確たる証拠である。それを我々が今、見せつけられているのである。他人の家に土足で上がり込み、好き放題に汚す「権利」を彼らはもっている。ひそかに、でなく「堂々と隠れて」やるというのが彼らのやり方であることを、私は別のところで指摘した(世界日報 2013/5/5)。

何が撒かれているのか知らないが、特に何も起こっていないではないか、と言う人がある

かもしれない。そういう人は「創造デザイン学会」サイトの「ケムトレイル：あまり知られていない恐るべき事実」という翻訳記事を読んでみていただきたい。その冒頭にこう書かれている——「過去10年間にアメリカで、呼吸器疾患が、最も高い死亡原因の8位から3位に上がった。喘息の率も西洋世界で倍以上になり、アルミニウム中毒が原因で起きているアルツハイマー病もまた急増している。」

確かに今のところ我々の周囲で、例えば喘息の急増というような話は聞かない。しかし気付かぬところで、別の何かが進行している可能性はある（彼らはこの地球上で最先端の頭脳と技術をもっている——だから支配できる）。この論文が言うように、彼らは、我々を「徐々に殺す」、つまり健康を奪われ土地を不毛にされて、「彼ら軍-医薬-産業複合体を頼らざるをえない人々を創り出す」作戦を取っている、という可能性は十分にある。

彼らのシナリオの根本にあるのは、我々の奴隷化と人口削減計画であることは間違いない。しかしこの地球を破壊したら、彼ら自身も困るのではないかという素朴な疑問が湧く。彼らのアジェンダの根本に何があるのか、そのシナリオに成算があるのか、という核心の問題に答えられる人はいないと思われる。我々としては、悪の勢力の「最後の悪あがき」と取りたいところだが、そのうち力尽きてやめるだろうなどと、放っておけるような問題ではない。我々が敵の実体（本質）をよく知って、その上で彼らと闘わない限り、彼らは決してやめないだろう。

我々はたいがい、ヒトラーは死んだと思い込んでいる。ヒトラーは死んでいないどころか、何倍にも輪をかけてこの時代に生きている。彼らは世界人口を5億に減らそうと計画している（ジョージア・ガイドストーンズ）。「優生学」というダーウィン思想を根拠にする哲学は、ヒトラー台頭のかなり前から欧米に存在し、今も「ローマ・クラブ」と呼ばれる、イルミナティ（ルシファー教団）に直結するグループの、最重要課題となっている。したがって、我々の教科書からダーウィン進化論はなくなり、NHKも大新聞も、ダーウィンの絶対化をおそらく義務付けられている。実は、そのあたりから目覚めなければ、ケムトレイルにむかつ腹を立てるだけでは、何の効果もないと知るべきである。

我々は今、彼らの長年の地球支配がやっと終り、彼らのような生き方が通用しなくなる、次元を高めた、新しい時代を迎えようとしている。そのような観点がなければ、彼らの暴挙の意味が分からず、有効にこれに立ち向かうことはできないだろう。